

ある日の夕方、 アダム・マストロヤンニは、オックスフォード大学で開かれるフォーマルなパーティーに参加するため、渋々と蝶ネクタイを結んでいた。彼はその会に出席したいとは思えなかったのだ。マストロヤンニは、その時、同大学で心理学を専攻する修士課程の学生で、望みもしない延々と続く会話から抜け出せなくなるだろうこと、そして、失礼のないように離席する術もないことは、当然のように知っていた。さらに良からぬことに、彼は突如として気付いたのだ、彼だって知らず知らずのうちに、相手が求めてもない会話を他人にすることになるかもしれないことに。「もしも双方が全く同じことを考えていたらどうなるだろうか。双方ともに話は済んでいるのにその場を離れられないという理由で、共に（会話から）抜け出せなくなってしまうとしたら、どうなるのだろうか。」と、彼は思いを巡らした。

マストロヤンニの考えは、的を射ていたのかもしれない。とある最近の研究では、ある特定の会話がどれくらいの長さ続いたほうが良いのかについて、話し手達がどう感じているのかを推し量るべく、話し手達の脳を調べた時に研究者達が発見したことについて報告がなされている。【**双方が会話を終わらせたいと望んだ時に会話が終わることはほとんどないことを、そのチームは発見した。**】 事実、人々は、話し相手がどのタイミングで会話を終えたいと望んでいるのかを判断することにとっても不得手である。しかしながら、いくつかのケースでは、会話が長続きし過ぎたからではなく、あまりにも短かったからという理由で、人々が不満を抱くこともあった。

「たとえ話し相手が望んでいる、ありとあらゆることを貴方が考えたとしても、貴方はおそらく間違いをおかすことだろう。」と、現在、ハーバード大学で心理学の研究生となったマストロヤンニは唱える。「だから、最初に適切だと思われた時に（会話を切り上げ）立ち去る方がよいのだ。なぜなら、これ以上話したくないと思うよりも、もっと長く話したいと思ったままの方がよいからだ。」

会話に関する過去の研究の大半は、言語学者や社会学者によってなされたものである。その一方で、会話の研究をしてきた心理学者達は、相手を説得するのに人はどのように言葉を使うのかといった、他の事柄を調べる手段として、彼らの研究を主に利用してきた。会話の終わりにどんなフレーズを口にするのかを調べた研究は僅かながら存在したが、主たる研究目的は、どのタイミングでそうしたフレーズを口にしようとするのかにはなかった。「心理学は、このことが実に興味深く重要な社会的行動であるという事実に関心になって気付いたのだ。」と、マストロヤンニは述べる。

彼と彼の同僚達は、2つの実験を通じて、会話におけるdynamics（△人間関係など会話に影響を与えるあらゆる事柄の相互関係を「力学」と称している）を調べた。最初の実験では、オンラインで参加した806名の被験者に、直近に交わされた会話の持続時間について尋ねた。【**それらのほとんどは、家族や友人と取り交わされた。**】被験者達は、会話のなかで話を終わらせたいと思った時があったのかどうかを報告し、会話が実際終わった時点と比べてそれがいつだったのかを推定した。

2つ目の実験は、実験室で行われた。研究者達は252名の実験参加者を見知らぬ人とペアを組ませ、1分から45分の間であれば、話したいことを何だっにかまわないので話すよう指示した。その後、研究チームは被験者達に（　イ　）を尋ね、そして、同じ問いに対して、話し相手がどう答えるのかについて推測するように依頼した。

マストロヤンニと彼の同僚達は、たった2%の会話だけが双方が望んだ時に終わり、片方が会話の終了を望んだ時に終わったのは全体の30%しかなかったことを発見した。約50%の会話において、双方が会話はもっと短いほうが良いと望んでいたが、会話を終えたいと思った時点がたいていは異なっていたのだ。【**概して、両方の研究における参加者達は、望んだ会話の長さが実際の長さの約半分程度だったということ**を報告した。】研究者達が驚いたことに、人々は必ずしも会話を早く切り上げたいと思っているばかりではないということも発見したのだ。則ち、会話の10%において、被験者達は双方ともに、やり取りがもっと長く続けばよかったのになあと願っていたのだ。さらには、見知らぬ人同士のやり取りのうち約31%で、2人のうち少なくとも1人は会話を続けたいと思っていた。

たいていの人は、話し相手の気持ちを正しく推測することも出来なかった。話し相手がどのタイミングで話をやめたいと思っていたのかを推測してみると、会話時間全体の約64%相当の時間分ズレた推測をしていたのだ。

会話相手がいつ会話を終えたいと願っているのかを、人々がこれ程までに全く判断できていないことは、「驚くべきことであり、かつ、重要な発見でもある」と、この実験研究には携わっていなかったダートマス大学の社会心理学者であるタリア・ウィートリーは語る。その点を除けば、会話というものは、「互いに相手と連携・調和しようとしていることを見事に言葉で言い表したもののなのです」と、彼女は述

べる。「でも、最後の最後で、それは全てバラバラに崩れてしまうのです。なぜなら、私達はいつ会話をやめるべきなのかを全くわかっていないからです」。この難問がおそらく、人々がコーヒーや飲み物を飲んだり、食事を食べたりしながら会話をしたがる理由の1つなのだろう。なぜなら「カップやお皿が空っぽになると、私達は抜け出す方法、則ち、会話を終わらせる潮時だという重要なキッカケを得ることができる」からですと、ウィートリーは続けて語る。

ニコラス・エプリーは、シカゴ大学で行動科学を研究する専門家で、この研究チームには所属していなかったものの、もし会話の多くが我々の望んだその瞬間に終わったら一体どうなるのだろうかという疑問に思っている。「他の誰かと交わしていたかもしれない、より長く、より深いレベルでの会話を私達が避けたがために、どれだけ多くの新しい見識や、目新しい考え方や、人生における興味深い事実の数々を私達は見逃してきたのだろうか。」と、彼は問う。

このことは日常生活で取り交わされる無数のやり取りにおいて確かめることなど出来はしないが、科学者達には、被験者が会話をやめたいと初めて思ったその瞬間に会話を終わらせる、あるいは会話がいくつかのタイミングを越えるまで続くようにする、のいずれかになるような実験をつくりだすことはできる。「ちょうど終わってほしいと思ったタイミングで会話が終わった人々は、それより長く会話を続けることになってしまった人々よりも、本当に会話を良い形で締めくくることができたのだろうか」とエプリーは問う。「私にはわからない。ただ、その実験の結果を心から見てみたい」。

そうした発見の数々は、多くの他の問いが投げかけられる端緒にもなっている。会話を規定するルールは他の文化では、もっとハッキリしているものなのか？ コツというものがあるのなら、トークがうまい人達は、何かをつかんでいるのだろうか？【グループチャットのdynamicsについてはどうだろうか？】

「会話について新たに科学するには、この研究のような厳密な記述的研究が求められるが、同時に私達は、会話における重要かつ広範囲に渡る難題に対処するのに寄与するであろう方法を試すべく、因果関係の検証実験も必要としている。」と、この研究には参画していない、ハーバード大学経営大学院で経営管理学の教授をしているアリソン・ウッド・ブルックスは語る。「私が思うに、かなり荒っぽくはあるが、人々がどのように互いに話をするのかについて、私達は厳密に理解し始めたところなのです。」